

近代日本文学における他者^①

Mark Williams

20世紀日本の歴史は、さながらジェットコースターのようなものです。大日本帝国の繁栄と衰退、15年戦争による混乱、原爆とその惨禍、外地からの引き揚げに続く国家の再建、めざましい経済成長にバブルの崩壊と、劇的な体験を重ねてきました。明治末期から現代に至るまで、国家の変動が続づいた近代日本においては、必然的に、日本人を「日本人」たらしめるのは何であるのか、という問いに、多大な知的探究の関心が向けられました。劇的な変化をとげた20世紀において、個人であれ、国家であれ、「自己」のアイデンティティを定義することがこれまでになく、重要となったわけです。そのような中、日本国家が諸国家に並ぶ地位を獲得することをめざしている一方で、明治の知識人が問題としたのは、近代化を進める中で日本固有の伝統文化をいかに保っていけるか、という点でした。

この日本の伝統の保持への関心は、1920年代から30年代にかけての「日本への回帰」という運動をもたらしました。戦時中、過激な愛国主義からくる「日本人たること」の自意識から、日本国家そのものの神格化をうみだしました。敗戦後、国家レベルでは荒廃の中日本を建て直すための国家モデルを模索する一方で、個人レベルでは、戦時国家の臣民としての自己認識と、戦後を生きる個人としての自己意識との間のギャップを克服していくという難しい作業に直面せざるをえなかったといえましょう。多くの外地からの引揚げ者にとっては、帰国のカルチャー・ショックから、新たな一種の疎外感も生まれました。加えて1960年代から70年代にかけての目まぐるしい経済成長、1980年代のバブル経

済、90年代のバブル崩壊のショックとそれに続く景気の低迷をして、戦後以来経済力を自己のよりどころにしてきた傾向は問題があるだけでなく、無意味であるということが明らかになってきました。こうしてみると、このような激動の時代を生きた作家による日本の近代文学が、「日本人」であることの意味やアイデンティティの定義といったテーマを中心としているのは、当然のことと言えます。

日本文学において、一環してもっとも頻繁に用いられてきた小説の形態が、私小説であることからアイデンティティ、「自己」に焦点が当てられてきたことは明らかです。小林秀雄は、1935年に、「私」という個人を扱う世界中のあらゆる文学の中で、「私」というものを、社会での他者との葛藤と無関係で描いているのは日本文学の特徴である、と書いています。小林の批評では、日本人の「純化された私」への傾倒は視野が狭く、問題をはらんでいると指摘しました。以来、日本人の自己の探求、そして「私小説」における主体性については、日本語でも英語でも多くの評が書かれてきました。確かに、私小説は日本人のアイデンティティの形成を考える上で、見落としてはならないものです。しかし、その以外にも、告白や個人の内面探求といった形態を使わずに、アイデンティティの問題を扱った小説があります。私は、20世紀の日本の作家が、日本社会の中で、またより広い世界でどのように自分というものを見てきたか、ということに興味を惹かれます。20世紀の全体像を見てみると、日本文学が、日本人の「自己」を、さまざまな様相を持つ日本内外の「他者」との対比の中で描こうと、思索を重ねてきたことがわかります。これらのことは、同僚のレイチェル・ハチンソンとの共同編著で来年出版予定の「日本近代文学における他者」という本で詳しく検証しています。

批評家のジョン・リーの指摘どおり、地図の上での日本は、20世紀を通じて大きく変化しました。そしてこの国境の変化は、そこに住む人々のアイデンティティに非常に大きな影響を与えました。大日本帝国の国境が押し広げられたことにより、移民や軍事移動など、物理的な人の移動が増えました。植民地時

代の日本人は、日本本土から離れば離れるほど、自分たちと異なった人々に出会い、また東アジア、東南アジア、さらに太平洋地域での戦争では、敵である外国人と直に接触することになりました。一方で、帝国の拡大に伴って、多種の人々が新しく日本の臣民となりました。1914年時点での「日本人」には、台湾、朝鮮半島、ミクロネシアの島々、樺太の南半分、さらに南満州の一部の住民が含まれていました。その後、これらの地域から多くの人々が日本本土へ戦時中の労働力不足を補うため移動させられ、民族としての「日本」は大きく変わりました。国境の変化は、こうして大日本帝国の一員に組み込まれているが、民族的起源は異なるという葛藤を生み出しました。この相反する自己の間の緊張感は、拡大する帝国の勢いによっていた人々や、拡大された日本領土の多民族社会に生きる人々によって書かれた文学に如実に現れています。同様に、連合軍の占領下に置かれた1945年から1952年の日本では、征服する側から被占領国へとという位置転換を強いられ、アイデンティティの危機が訪れました。戦後の「転向文学」に目を通すと、そこには共産主義を、あるいは現人神とされた天皇を、または神国日本そのものへの信念といったものを捨てていった有様が、痛々しく告白されています。戦後の日本文学では、責任、共謀、新たな自己の探求といったものがアイデンティティを探るうえで、興味深い問いかけを生み出しています。知識思想界で「日本」を定義するうえで歴史的背景が重要な要素であったことは確かであります。重ねて、文学の世界においても、急速に変わりゆく20世紀の世界の中での自己というものの探求が問題となりました。

そもそもアイデンティティの問題提起、定義づけ及び探求とは、ある種の「他者」の存在に対する「自己」認識というものにかかっているものです。しかし、その「他者」はどうやって現れるのでしょうか。この問題を考える上で最初に言っておかねばならないことは、ここでいう他者は、作家が自己となる日本人自身の対極になるものとして作り上げた、いわば架空の存在であるということです。このような二者を対比させる構造は、それぞれの定義を定めるために物事を対比させる、現象学の基本的な構造です。私たちは、物事を他のも

のに関連付けることでそのものの本質を見つけようとしています。たとえば、東洋と西洋などを対比させます。このプロセスの核となるのは、ジェームズ・キャリアーは自己と他者の「本質的弁証的定義」というものを提唱しています。それは物事の本質を捉えるということは、対比するもの同士、それぞれの本質なる核の部分、さらには、対照的な部分のみを抜き出していくことだとする考え方です。この自己と他者という考え方、さらにそれらの本質を捉えることに関する考え方は、近代日本文学の分析に非常に適しています。しかしながら、こういった表現について考察する際には、二者構造に含まれる多くの問題点についても注意しなければなりません。まず初めに、二者構造というものはそもそもすべて恣意的なものであるという点です。それは自分が定義したいものに対比させるものを、結局自分で選んでいるからです。この選択はよくて主観的で恣意的であり、場合によっては故意にゆがめられる可能性もあります。2つ目の問題点は、二者構造にはほぼ例外なく、定義したいものを対照的な他者よりすぐれたものとして位置づけるという上下構造が含まれているという点です。他者に対する自己の優越感は、長期的には当然のことといえます。そして3点目は、比較、又は対照とは、より効果的な対比をするために、相違点なり類似点なりを強調し、自己と他者の特定の要素を際立たせる行為であるということです。結果的に、これらの特定の要素が、自己全体と他者全体を象徴するようになります。しかし、多くのケースにおいて最も興味深いのは、この二者を選択する行為、つまり、誰が自己となるのか、そして誰、あるいは何が他者となるのか、を決めるという決断そのものであります。

さて、「自己」観と「他者」観の構成概念的性格を指摘するに当たり、私たちはここでこのアプローチは一般的に良く知られている「日本人論」とは全く別のものであるということを述べておかなければなりません。20世紀の日本人論の論者たちは、ある特定の「日本」というものを、対極にある「他者」を想定することによって定義、固定しようとしてきました。マイケル・ウェイナーの指摘にありますとおり、日本人論の一番の焦点は、その名のとおり、日本人その

ものです。つまり、日本を論じることは必然的に人種的区分や差異を強調することにたどり着くというわけです。確かに、日本人の「自己」やアイデンティティの定義、といった問題は、日本人であることの意味を定義しようとしているという意味では、紛れもなく「日本への回帰」運動や日本人論につながっています。しかし、文学における日本人論のアプローチは、日本人の「自己」を他者との対比で具体的に描くことによって、「日本人たること」の「唯一無二」の特徴を描こうとする傾向があります。それに対して私は、構成概念を作り上げる上でのプロセス自体に関心を向け、作家がいかに、またなぜ、何を目的として、ある特定のイメージを自己と他者をあらかずために選んだのか、という点に注目していくことに意義があると思うのです。このような日本、および他者という概念の流動性を強調することで、私たちはいわば描写の考古学ともいえるものに着手します。この方法によって、日本人論が主張する、根拠に乏しく人為的な区分に対して、説得力をもって対抗する理論を打ち立てることができるとともに、これらの描写の裏にある過程に光を当てることで、ある特定概念の固定化を防ぐことが可能になると考えます。

二者対比を使って論じる際の主な問題として、恣意性、上下位置関係の前提を含む単純化、差異と区分に過度に向けられる誤った焦点などをあげました。しかし二者構造においておそらく最もやっかいな点は、デリダが論じるように、2つの相反する本質を完全に有する実体などは、現実には存在しえないということでしょう。常に他者との関係の中にあり、常に他者の影響を受けている状態で存在する現実から、誰しもが内面のどこかしらに他者の形跡を見いだせます。そこで、「他者」から完全に自立した「自己」はない、というデリダの論から、アイデンティティを探る過程こそがアイデンティティそのものよりも常に重要であるという結論が導き出されるのです。言い換えれば、相対する二つの存在の間の相互関係にこそ、それぞれの構成された実体自身よりもはるかに重要な意味があるということです。

言うまでもなく、この関係性と描写の意味合いを分析する上で、ジャック・

ラカンとミシェル・フーコーの理論を見過ごすことはできません。彼らは二人とも、人間の経験のさまざまな現象を、自己と他者の相関性を用いて解釈しました。ラカンによりますと、他者への欲求は動機づけとして働くと同時に、欲求不満、また分裂の原因ともなります。このように、ラカンの理論による他者は、自己以外のすべてのものを含むのです。

一方、フーコーの論では、自己と他者の関係は力という観点から表わされ、フーコーの言う端からの反論的議論は、ポスト・植民地的な最も優れた作家たちに影響を与えました。(たとえば：スピバック、サイード、それにバーバは、フーコーの理論を、文学において権力の影響範囲をフルに探り、表現しています。)

このように、ラカンとフーコーはまったく違ったアプローチを展開したわけですが、しかし彼らの理論に共通していえるのは、最終的により大切なのは構成概念自体ではなく、自己と他者との関係であるということです。ですから、ここで問うべきなのは、日本の作家の「日本人」であることの意味の探求にあたって、他者を表現するということが、いかに新しい定義づけに影響を与えたか、という点です。作家自身が他者との関係を認識していく中で、彼らはどのような問題、疑問、またアイデンティティの危機を経験したのでしょうか。大切なのは、自己が他者とかかわりを持ち、その関係の意味合いを執筆という形で表す決定的瞬間を意識して感知することです。表現活動の過程でおこるその認知の瞬間は、一種の不安が伴うことも多々ありますが、常に重要な意味合いを持つものです。私がここで訴えたいのは、日本の作家のこの認知の瞬間を捉えることの重要性です。それはアイデンティティを探る個人的内面、及び、たどり着いたアイデンティティに伴ってくる責任に、関係しています。

ではここで、時間さえあれば、各作家が自己と他者という観念から世界を理解するために作り上げた概念の構造を探求するために、彼らの思考論へと移るべきです。というのは、彼らの作品でみられる概念構成、探求、転覆、そして倒置という一連の作業は、各作家が近代社会に合わせて身に付けた、非常に高

度な批判思想の表われだからです。ですが、時間がないから、結論にうつりたいと思います。それは他者とされるものを、大きく3つに分類することができると思います。我とハチンソンの編著では、日本の外側の他者、日本の内側の他者、そしてこの両者の間にひそむ植民地的ポスト・植民地的な複雑な他者の3つの角度から他者を扱っています。もちろん、この分類は暫定的なものではありますが、ひとつの論法として、他者は私に近い存在なのか、遠い存在なのか、または私自身の一部なのか、という角度から他者を捕らえ、定めることができます。

一つ目の「外部の他者」の部では、日本の外にいる他者へ視点を向けることによって、「ノン・ジャパン」、「ノン・ジャパニーズ」とみなされるものの内容を解明していきます。ここでとりあげられるのは、実際に海外に身を移し、カルチャー・ショックを経験した日本人作家です。このような例の多くはすでによく知られ、幅広く論じられてきましたが、永井荷風の「あめりか物語」、遠藤周作の「留学」、それに横光利一の「上海」、「巴里」などがそれにあたります。しかしこれらのどの作品を見ても、著者は日本という枠を乗り越えて、いわばフュージョン（融合）の世界での意味を探り、そして国家のアイデンティティの意味を問うところまでたどり着いたのだと思われます。

二つ目の、「内部の他者」で取り上げるのは、日本の中での中央と周辺の問題です。中央は、その社会の周辺や末端をどのように見なしているのか、またいわゆる辺境はどのように中央を捉えているのか、という問題を探求します。日本国家の「中心」、すなわち「典型的」日本社会という構成概念が存在する考え方自体、ここで基本的な問題を提起します。いったい誰が中央と周辺を決め、それぞれに属する人々を決めるのか。また、その分類は変更可能なのか。ここで焦点があてられるのは、「通常」の日本人に対して、しばしば他者とされてきた人々であります。つまり、被差別部落出身者、同性愛者、「経済の奇蹟」から取り残された人々、戦時中日本に連行され戦後祖国に戻れず日本に残らざるをえなかった人々、在日韓国人、それに女性作家などが例にあげられま

す。すなわち、社会階級、人種、民族、性別、性的志向などの差異が人々を区別する線を引くわけです。

しかしこれらすべては、「中央と周辺を互いに引き寄せているのは何か」「どこか中間、あるいは二者の接点はあるのか」という問題にたどり着きます。その答えを探るため、私たちはここで、民族的には日本人ではないものの、歴史的事情から、ある時期日本人であるとされた、あるいは日本人である事を強いられた人々に目を向けることが必要となります。最もわかりやすいのは、日本の植民地支配下の韓国、台湾、沖縄、満州、そしてミクロネシアの島々の人々であります。もともと他者であった者が「自己」となることを強いられたという点を考えれば、植民地の他者は、日本と他者の出会いの象徴といえるでしょう。ですから、日本語で書かれた沖縄文学、在日文学、台湾文学に注目し、彼らに強いられた日本人としてのアイデンティティの性質を探ることで、意識的なものにしろ、意識下のものにしろ、私たちはここで日本のアイデンティティの文化的要素の問題に戻ってきます。そしてそこから、日本像というもの、中央と周辺、というよりは、その交差し合ったところから発せられる力強い声によってより深みを増してくることでしょう。

[注]

- ①この発表はRachael Hutchinsonとの共同研究に基づいているもので、Hutchinsonに厚くお礼申し上げます。

*** 討議要旨**

山崎佳代子氏は、①自己をどう描くかということで「私小説」を挙げたが、私小説は日本だけの現象か、ということをもう少し検証した方がいい。②自己と他者ということについて、コレクティブとしての他者・コレクティブとしての個人という問題と、コレクティブ（集団）に対する個人という2つの次元の問題をどう分けるのか、或いは分けないのか、と尋ね、発表者は、①私小説について、日本独特の形式というわけではないが、「私小説」には独特の特徴があること、②集団と個人の問題については、分けるべきではないと考える旨、回答した。

坪井秀人氏は、①3つにモデリングする考え方は面白いと思うが、分類よりもむしろ関連を考えた方が生産性があるのではないか。②植民地・沖縄という空間的な周縁という問題から第3番目のモデ

ルが構想されているが、それ以外の性やセクシュアリティの領域において、第3番目のモデルは成り立つのか。国境性という境界だけで考えているのか、それ以外の階級・性差も含めて考えているのか、と尋ね、発表者は、①3つを完全に分けて考えているわけではない。②階級・男女関係にしても、本人・社会が自分を他者にするという、いろいろな層のある意識の存在に注目した、と答えた。